会報 ひろしま日豪協会
HIROSHIMA JAPAN-AUSTRALIA SOCIETY
2011年9月
No.29

Contents
広島日豪協会11年度総会開催……1
2011年イザベラ・ア・カペラ
日豪友好コンサート旅行について …2
オーストラリアでの観光プロモーション …3
絵本「わたしのヒロシマ」、
故郷で再出版 ……4
事務局からのお願い ……4

広島日豪協会11年度総会開催

2011年6月15日（水）、広島日豪協会の2011年度の年次総会が開催されました。会場のANAクラウンプラザホテル広島には、会員の方々約70名が出席しました。総会は永野会長が議長として会議を進め、「2010年度事業報告・収支報告」が事務局から報告され、続いて「2011年度事業計画（案）ならびに収支計画（案）について」が諮られ、2つの議案ともに満場一致で承認されました。さらに、中峯勇二理事、紙元秀樹理事、高沢朝美理事の退任に伴い、調子寛樹理事、万徳良男理事、渡辺洋一郎理事に、また秋葉忠利顧問、大田哲也参与の退任に伴い、松井一実氏、深山英樹氏にそれぞれ就任していただく役員人事（案）も満場一致で承認されました。調子理事は理事会の互選で副会長に就任されました。

総会後の懇親会は、新しく就任されたひろしま国際センターの万徳良男理事が乾杯の発声をし、広島日豪協会2011年度の活動のスタートを切りました。

さらに懇親会にはオーストラリアのサザンクロス大学音楽部の学生と卒業生からなるコーラスグループイザベラ・ア・カペラがゲスト出演し、素敵な歌声をたっぷり披露してくれました。会場ではテレビ新広島の着物部、KIKURA（キモノクラブ）の5名が特別参加し会場の雰囲気に華を添えました。

恒例の抽選くじ引き大会では、オーストラリアワインやさまざまな賞品が会場を沸かせ楽しいひと時となり、新しく副会長に就任されたマツダの調子寛樹理事の中締めをもって懇親会が終了しました。

2010年度収支報告書

（自　2010年6月1日　至　2011年5月31日）

収入の部		支出の部	
科　目	金額（円）	科　目	金額（円）
前期繰越金	288,471		
会費		活動交流費	
年会費	705,000	総会開催費	528,477
総会会費	347,000	会報発行費	110,250
オーストラリアデーを祝う会会費	278,000	オーストラリアデーを祝う会開催費	527,528
預金利息	94	クイーンズランド州洪水義捐金	100,000
		事務費	
		通信費	7,600
		消耗品費	28,087
		振込手数料	7,100
		次期繰越金	309,523
合　計	1,618,565	合　計	1,618,565

以上、監査の結果適正かつ妥当であることを認めます。
平成23年6月9日
広島日豪協会　監事　橋本　英彰
監事　川口　英二

2011年度収支予算（案）

（自　2011年6月1日　至　2012年5月31日）

収入の部		支出の部	
科　目	金額（円）	科　目	金額（円）
前期繰越金	309,523		
会費		活動交流費	
年会費	700,000	総会開催費	500,000
総会会費	300,000	会報発行費	110,000
オーストラリアデーを祝う会会費	270,000	オーストラリアデーを祝う会開催費	500,000
		事務費	
		通信費	16,000
		消耗品費	20,000
		振込手数料	3,000
		次期繰越金	430,523
合　計	1,579,523	合　計	1,579,523

2011年イザベラ・ア・カペラ日豪友好コンサート旅行について

マクラレン温子（たづこ）
（オーストラリア国立サザンクロス大学　インターナショナルオフィス　日本渉外担当、日本語教師
ジャパンセンターコミッテー会長、イザベラ・ア・カペラ日豪友好コンサート旅行企画者）

6月3日から始まった7回目の11年にわたるサザンクロス大学、イザベラ・ア・カペラ日豪友好コンサート旅行。

今年は、3月11日午後に東北地方に未曾有の大地震が発生。思わぬ大惨事、大津波の被害、原子力発電所の事故と次々、事が拡大化。

直後のすさまじい日本からの報道を見ていると、一昨年から計画をしていたこの6月の3週間の日本各地に於ける日豪友好コンサート旅行も、東京地方の公演は断念もやむを得ないだろう…というのが、当初の誰もが抱いた気持ちだった。

その後、世界中からの多くの日本訪問への否定的な放送が続く中、オーストラリアの国営ABCテレビ放送でマリー・マクレーン在日オーストラリア大使（当時）が、オーストラリアの国民に向け、卓越した素晴らしいスピーチをされた。

彼のスピーチは“今、日本は大地震や津波、原子力発電所の事故と非常事態に陥っているが、日本は第2次世界大戦でも東京・大阪・広島・長崎と、ほとんど日本国中が壊滅の危機に陥ったのにも関わらず、見事に立ち直った…私は、日本人の勤勉さ、物ごとをやり遂げようとする真摯さ、それらに対するまれにみない努力や困難に屈服しない強い精神などによって、必ず見事に立ち直ることができる素晴らしい国民だと信じている。”という力強いメッセージ。

私は、感動のあまりマクレーン大使に、“スピーチは素晴らしかった。私達は6月に予定しているアカペラの日本公演をキャンセルせず実施しようと思っている…”とメールを送ったところ、すぐに返事が来て「日豪友好コンサート旅行の成功を祈る。東京のオーストラリア大使館でも歓迎する」という温かいメッセージ。

今回の日豪友好コンサート旅行は日本国中の多くの方にお世話になったが、その中で特に日本を愛するマクレーン大使には、非常にお世話になった。

前回、2009年の6回目の日豪友好コンサートは大成功で、各地の病院・養老院・幼稚園・交流大学・教会・寺院（東大寺も含む）・市役所・公会堂・ホテルなどさまざまな所で非常に喜ばれ、大きな日豪友好の交流ができた。ホテルなどに宿泊せず、私の日本各地の友人関係を頼りにホームステイをアレンジ、できるだけ経済的に旅行を企画したにも関わらず、大勢のメンバーの旅費にかなりの赤字が出たため、企画責任者の私がそれを負う形となり、これ以上は続けられない、これきりになるだろう…というのが私自身のその時の正直な感想だった。

その時のコンサート旅行では、かねてから大変協力的だったマクレーン大使が、東京の大使公邸に私共のグループを招待くださり、アットホームな雰囲気の中でのミニコンサートを開いてくださった。

その時、マクレーン大使がなにげなく“今度はいつ来日するのか…”と聞かれ、とっさに何と答えて良いか分からなかったが、それでも正直に“経済的に非常に困難なので、いつになるか分からない…”と返事。

大使がその時、オーストラリアの政府の豪日交流基金の事を教えてくださったことにより、今回の日豪友好コンサート旅行が実現したといえる。

それと共に“継続は力なり”という言葉の通り、1999年からジャパンセンター・グリン神父記念館設立のために、イザベラ・ア・カペラコンサート旅行を応援し続けてくださっている日本各地での多くの協力者の方々の変わりない温かいご協力、各地のホームステイの恩恵の賜物でもある。

また、同時に前回のコンサート旅行で、岐阜県美濃加茂市の木沢記念病院でのコンサートの折、山田實寛院長先生が、交通事故で全身不随になっている若者達の前で歌わせてくださった事に涙が出るほど全員が感動した。特にその時のメンバーの一員だったプロのピアニスト、ヅラン・カーノーが感動のあまり、近くにあったピアノで、無言で演奏。

その時には、これまでリーダーだったジュード・マギーがリーダーを家庭や仕事等の事情でやめる決心をしていて、アカペラグループの危機でもあった時、ヅランがリーダー役を引き継ぐ決心をした事など、多くの幸運な偶然が、アカペラのグループが、今回まで存続できたゆえんでもある。

豪日交流基金の堀田満代事務局長にもお世話になり、コンサートの最後には、埼玉県加須市での避難所でのコンサートもサザンクロス大学の総長や料理の鉄人ムッシュ・坂井氏などと共に公演が実現でき、日本各地で実施したチャリティーコンサートの義援金30万円をお届けできた事も嬉しい出来事だった。

テレビ新広島では、いつものように朝の情報番組“ひろしま満点ママ”に生出演させていただき、午後は広島原爆ドームへ、若いメンバーの思う事は多かったと思う。

たまたまグループが原爆ドームの前で“千の風になって”を歌っていたら、NHKのドキュメンタリー撮影グループが居合わせ、カメラを回しておられた。

その夜は、広島日豪協会の総会でも歌わせていただき交流の場ができた事は、今回のコンサート旅行の中でも思い出深い一日だった…と思う。

このイザベラ・ア・カペラ日豪コンサート旅行のきっかけとなったのは、1999年、シドニーの日本領事館からサザンクロス大学に大阪万博基金の

申請書が届き、大学に日本の文化を紹介するジャパンセンターを設立出来たら…と思った事から始まる。

同じ年、戦後日豪のかけ橋となられたリズモア出身の故トニーグリン神父のセミ・ドキュメンタリー映画“愛の鉄道”が、千葉茂樹監督、好美夫人によって製作され、リズモアでも撮影が行われた。

この映画を見て、トニーグリン神父の生涯をかけた日本人への愛に感動、大学にジャパンセンターが出来れば彼の名前をつけたいと考えた。

あいにく、万博基金申請は手元の資本に対して同額の申請という事で申請は不可能だったが、千葉先生ご夫妻の強い後押しもあり、1999年12月に大学で映画会を設定。その時、ちょうどシドニーにレコーデングで来豪されていた“愛の鉄道”の主題歌を歌った奈良のソプラノ歌手荒井敦子氏がリズモアに来てくださり、初めてのセンター設立基金コンサートを開く。

その時、ゲストで出てくれたのがイザベラ・ア・カペラのグループだった。

美しいハーモニーに感動。リーダーのジュード・マギーの賛同を得て、2000年から日豪友好コンサート旅行を実施。

2004年9月には、実にささやかなジャパンセンターが大学内に開設され、光栄にも当時の大島賢三在オーストラリア日本国大使も開館式に臨席された。

テレビ新広島の永野正雄社長が、広島経済同友会の方と今年11月にオーストラリアをご訪問される際、日豪友好の街リズモアにも訪問していただけるとの事で、トニーグリン神父記念館ジャパンセンターを見ていただきたく、アカペラのメンバーと共に皆心から楽しみにお待ちしている。

オーストラリアでの観光プロモーション

財団法人広島観光コンベンションビューロー観光振興部　坂本　優治

こんにちは。国内外からの観光客誘致に取り組んでいる広島観光コンベンションビューロー観光振興部の坂本と申します。

最近は新聞などで東アジア、特に中国からの観光客についての記事を見かけることが多いかと思いますが、広島ではどの国からの観光客が多いかご存知でしょうか。2009年の統計では、1位がアメリカ、そして2位はオーストラリアです。さらに、各国の「日本への旅行者のうち、広島を訪れる人の割合」を比較すると、オーストラリアは1位。つまり、「日本に旅行するなら広島は訪問しなければと考えている人が一番多いのが、オーストラリア」ということになります。

とは言っても、オーストラリアからは年間約35万人が日本に来て、そのうち広島に来ているのは約3万人程度。まだまだ広島への観光客数は伸びる余地があります。そこで、私達はオーストラリアを重点市場として、広島のPRに取り組んでいます。これまで、オーストラリアの旅行会社やメディアなどへの観光情報発信やパンフレット提供などを行ってきましたが、2010年11月、実際にオーストラリアを訪問してプロモーションを行いました。

訪問したのは、ゴールドコースト・シドニー・メルボルン。ゴールドコーストで開催された教育旅行セミナーに参加した他、各都市の旅行会社等13社を訪問しました。

教育旅行セミナーは、日本語を履修している生徒を引率して日本旅行をしたいと考えている学校を対象に開催されました。日本全般の説明のあと、東京・京都・広島の紹介も行われ、参加者はセミナー終了後も積極的に質問をするなど、大変熱心な様子でした。

訪問した旅行会社の方々も広島についての情報収集に熱心で、私達の訪問を歓迎していただきました。ほとんどが日本での主な旅行先として東京・京都・広島を挙げられ、オーストラリアでの広島の認知度の高さを改めて実感。今回は、世界遺産航路やチャータークルーズなどの川・海を楽しむ手段や、お好み焼調理体験などの広島で体験できるメニューなどを提案しました。

私自身、初めてのオーストラリア訪問でしたが、何よりも印象に残ったのはオーストラリアの方々がフレンドリーで親切なことでした。訪問した会社で親切に応対していただいたのはもちろん、食事や買物で訪れた先でも皆笑顔でフレンドリー。少し道をゆずっただけでお礼を言われるなど、何て良い人達なんだと感動することもしばしば。「今度は仕事でなくプライベートで来て、ゆっくり滞在してオーストラリアを満喫したい」と心から思いました。

今回の訪問は、旅行会社の方々とよい関係を築くことができ、帰国後早速1社が広島に視察に来られるなど、手ごたえのあるものとなりました。今後も、より多くのオーストラリアの方々に広島に来ていただけるよう、引き続き取り組んでいきます。そして、広島に来られた際には、私がオーストラリアを訪問した際と同じくらい満足して、広島を好きになって帰っていただけたらと思います。

教育旅行セミナーの様子

絵本「わたしのヒロシマ」、故郷で再出版

世界の子ども達の平和教材として使われている絵本「わたしのヒロシマ」が、この本の作者森本順子さんの故郷広島で再出版されました。森本さんを知るお2人から、再出版へのエピソードなどを聞きました。

■NPO法人HPS国際ボランティア　理事長　佐藤　廣枝

私が画家であり絵本作家の森本順子さんに出会ったのは、2008年ピースボートによる「被爆者地球一周証言交流」の旅でした。

森本さんは13歳のとき、当時通学していた女学院を病気にため欠席し三篠の自宅で被爆されました。その後50歳でオーストラリアに渡られたのですが、同窓生350人も原爆の犠牲となり、生き残った自分に責任を感じ真実を「わたしのヒロシマ」という絵本に書きのこされました。

しかしオーストラリアでの出版に関しては困難を極め、ついに1987年、コリンズ社により出版されました。

翌年日本の金の星社で出版され、2004年には母校女学院の教材になりました。その後、オーストラリアでも副読本となり広く読まれています。

私もこの絵本を見たとき絵も素晴らしく、まさに昭和20年にタイムスリップしたものでした。昭和の風景から戦争が始まり、原爆が投下された惨禍にいたるまで繊細なタッチで真実が描かれています。

この絵本こそ被爆の実相を語り継ぐためのもの、そしてヒロシマの心を継承する重要な役割を果たしてくれると確信しました。作者の熱い想いで「和英併記版」として、このたびヒロシマから世界へと大きな希望を持って出版することができました。

広島の「原爆資料館」をはじめ広文館、フタバ図書、紀伊國屋書店、ジュンク堂などに置いてあります。どうかお手に取ってご覧いただければ幸いです。どうかよろしくお願いいたします。

前列右から3人目が森本さん、4人目が佐藤さん、前列左端が笠間さん

■テレビ新広島（元シドニー支局長）　笠間　雅一

私が森本さんのことを知ったのは1992年…オーストラリアにTSSシドニー支局を開設し取材活動を続けていた時で、この国では平和教育が熱心で、そのきっかけは広島原爆の日であるということを知りました。ある小学校へ取材を申し込み、訪れた小学2年の教室で先生が子ども達に読み聞かせをしていたのが「わたしのヒロシマ」でした。

森本さんご自身も依頼があれば積極的に小学校などへ出向き子ども達へ自らの被爆体験を語る姿も取材しました。森本さんは授業の最後にこのような言葉で締めくくっていました。「私は被爆した経験を後世に伝える義務があるんです。皆さんには戦争をする大人になってほしくないんです。命の大切さをわかる大人になり、それを次の世代へ伝えてください。お願いしますね。」…と。

その当時はまだ通訳を介していたと記憶していますが、数年前に放送された森本さんを取り上げたドキュメンタリー番組では、ひとりで教壇に立ち英語で堂々と語っておられる姿を拝見し、そのメッセージは子ども達に強く印象付けられていると確信しました。

私は微力ながら被爆体験記の朗読ボランティアに携わっていますが、森本さんとの出会いがきっかけでした。2年前に夢が実現…森本さんがステージ上で被爆直後の絵を即興で描く「ライブペインティング」の横で「わたしのヒロシマ」を朗読する機会をいただきました。当時77歳の森本さんは墨汁の染みた太い重い筆を手に60数年前の目の前に起きた出来事を満身の力を込めて描かれました。その迫力に圧倒され「体験者の思いを継承するのは並大抵のことではない」と平和への思いの大きさの違いを見せつけられたように感じました。森本さんは「年齢的にこれがもう最後かもね…」とおっしゃっていましたが、まだまだ伝えていただかなくてはならない世界情勢にあり、私も被爆体験を継承していく一員として、森本さんの次回の帰郷を心待ちにしているひとりです。

事務局からのお願い

❶ 会　費　納　入：2011（平成23）年度の会費納入ください。
❷ 寄稿・情報提供：オーストラリアに関する事、何でも結構です。情報をお寄せください。
❸ ホームページ：Eメールどんどんお寄せください。

会報
ひろしま日豪協会
発行日／2011年9月　発行所／広島日豪協会　〒734-8585　広島市南区出汐2-3-19（株）テレビ新広島　人事総務部内
☎／082-256-2200　FAX／082-253-1203　Eメール／nichigo@tss-tv.co.jp